

サロベツ原野だより Vol.13 -No.1

ホームページ URL <http://www.sarobetsu.or.jp>

E-mail: info@sarobetsu.or.jp

〒098-4122
北海道天塩郡豊富町
字豊富東 2 条 5 丁目
TEL (0162)82-3950
FAX (0162)73-0360



＜春のサロベツは北の繁殖地を目指すガン・ハクチョウたちで賑わっている。

左：利尻山とマガンの群れ 右上：オオハクチョウ、右下：マガン＞

目 次

- 1. お知らせ……………P.1
- 2. 特集
 - (1) サロベツのガン・ハクチョウ類…P.2～3
 - (2) 豊富町郷土資料の整理状況 …… P.4
- 3. お便りから
 - (1) 稚咲内砂丘林に寄せて……………P. 5～6
- 4. コラム
 - (1) サロベツ今昔物語……………P.6
 - (2) とよとみの民話……………P.7
- 5. 事務局からのお知らせ
 - (1) 新スタッフの紹介……………P.7
 - (2) 湿原センター情報……………P.7
 - (3) サロベツ四季の旅……………P.8

※今号はコラム「私とサロベツ」「おすすめ本紹介」はお休みします。
ご了承ください。

※転勤などでお引越しをされた方は、住所変更のご連絡を事務局まで
よろしくお願いします！（連絡先は表紙の上部に表示しています）

1. お知らせ

サロベツ原野 外来種除去イベント

国立公園本来の素晴らしい自然を守るため、
稚咲内砂丘林縁にて特定外来生物である
「オオハンゴンソウ」の除去活動を行います。



日時：5月19日(日) 9時～12時

集合：サロベツ湿原センター 9:00

持ち物：汚れても良い服装、長靴、帽子、

虫よけスプレー、飲料など

※詳細は近くなりましたら、ホームページ場などでご案内させていただきます。

2. 特集

(1) サロベツのガン・ハクチョウ類

長谷部 真（豊富町・NPO職員）

サロベツには春と秋に多くのガンカモ類が渡ってきます。その中でも、大型なのがオオヒシクイ・マガン・オオハクチョウ・コハクチョウです。

（図1、図2、図3、図4）



図1：オオヒシクイ



図2：マガン



図3：オオハクチョウ



図4：コハクチョウ

オオヒシクイは3月終わり頃に天塩町にある振老沼や周辺の牧草地で初認され、雪解けが進むと共に、ペンケ沼（道はありません）や兜沼とその周辺の牧草地に次第に移動し、多いときには2,000羽ほどになります（図5）。マガンはヒシクイよりやや遅れて4月上旬頃に初認されますが、その数はオオヒシクイよりはるかに多く40,000羽ほどになります。春のマガンの群れが一斉に飛ぶ様子は圧巻です。

オオハクチョウは3月末にガン類と同様に天塩町で初認されます。ガン類とは異なり、乾いた牧草地を利用することはほとんどありません。湖沼や雪解けでぬかるんだ牧草地におり、餌を探します。また、春に雪解けによりいち早く融けた河川や氾濫した河川沿いや冠水した牧草地に集まります。この中にマガンやヒシクイが混じっていることもあります。氾濫原からは水が引くとすぐにいなくなります。コハクチョウはオオハクチョウよりやや遅れて渡ってきます。両種ともサロベツにはあまり滞在せず、稚内大沼でコハクチョウは多い時に4,000羽、オオハクチョウは800羽程度集まります。ガン・ハクチョウ類は5月上旬にはロシアに向けて旅立っていきます。

秋は8月下旬頃にロシアから渡ってきたオオヒシクイが兜沼で初認されます。しばらく兜沼に滞在した後、周辺の牧草地に見られるようになります。春とは逆に徐々にペンケ沼、振老沼周辺と南に向かって移動して行きます。9月下旬から



図5：ガン・ハクチョウ類中継地位置

10月上旬が渡りの最盛期で、多いときに5000羽ほどが見られます。マガンは9月下旬頃から渡り始め、10月中旬頃に渡りの最盛期を迎えますが、数はヒシクイよりは少なく1000羽ほどです。秋の渡り経路は春より分散しており、これらの中継地に寄らずに、沼川、有明などの内陸側を通る個体もあり、海岸沿いだけでなく天塩川沿いを上流側に向けて渡る個体もいます。ヒシクイやマガンは11月になっても雪が積もるまでは少数が残ってます。

秋のハクチョウ類はほとんどがコハクチョウで、オオハクチョウは少ないです。10月初め頃に稚内市大沼で初認されます。大沼では10月中旬から下旬にかけてが渡りの最盛期で、コハクチョウは4000羽ほどが見られます。サロベツに滞在する個体は少なく、中継地を通過して海岸沿いをどんどん南へ向けて渡っていきます。

渡りの時間帯は視認可能な時間帯では朝と夕暮れ前が最も多いですが、渡る日と渡らない日にははっきりと分かれています。多い日には一日中渡っていることがあります。ガン類は風が強い日にあまり渡りませんが、ハクチョウ類は体が大きいいためか、多少風が強くても渡ります。夜にも渡っているようで、豊富町や幌延町の市街地上空から夜に鳴き声が聞こえることがあります。

オオヒシクイの中に亜種ヒシクイやここ数年は稀にチュウカナダガンが混じっていることもあり、マガンの群れの中にはカリガネやハクガン、シジュウカラガンが混じっていることもあります(図6、図7)。ヒシクイやマガンの群れに混じっているこれらの種を探すのはガンの観察の醍醐味です。



図6：ハクガン



図7：チュウカナダガン

(2) 豊富町郷土資料の整理状況

川崎 正大（豊富町・NPO職員）

豊富町の歴史的資料をしっかりと把握・整理し、将来にわたり残していくために、豊富町教育委員会の委託でH25年から始まった町内の郷土資料室整理作業も昨年度で6年目を迎えました。



上写真：昭和5年に建てられた豊富町に残る最古の木造住宅である
兜沼資料館（旧兜沼郵便局）

これまで豊富町郷土資料室のほかに、旧庄内小中学校や兜沼資料室、稚咲内地区、旧豊徳小学校に保管されてある農具や生活用品、日曹炭鉱が賑わっていた時代の機械用品や過去の書籍など近現代の物から擦文時代の土器に至るまで多種多様な資料の登録作業を行ってきました。



日曹炭鉱時代の炭鉱列車（昭和34年）

収蔵品の登録作業は当法人のスタッフと豊富町郷土郷土研究会の皆さまにもご協力をいただきながら実施し、H30年度の作業を含めると計3,979点の品々を登録しています。



馬そりでゆく（豊徳地区 昭和30年代）

H30年度の作業に関しては、主に兜沼郷土資料室に保管してあった約700冊の書籍と旧豊徳小学校に保管してある農具など合わせて835点の資料を登録しました。主な作業は皆さんで手分けをしながら、サイズの計測（高さ・横幅・奥行）写真撮影、データ入力を行うのですが、資料の中には昔懐かしい開拓時代の農具、馬そりや生活用品、何と書いてあるのか、もはやわからない書籍など私にとっては初めて見るものが含まれていて、どれもこれも宝の山といったところです。



登録作業風景（湿原センター）

昔の様子をよくご存じの郷土研究会の皆様とご一緒に作業をさせていただきますので、その器具の使い方や当時のお話なども伺うことができ、その時代の先人たちに思いを馳せながら楽しく、また貴重な時間を過ごさせていただいています。



旧豊徳小学校での作業風景（左）馬そりの一部（右）

今後の予定としては、兜沼資料室と旧豊徳小学校に残る資料の登録作業を継続すると共に、登録した資料を当時の様子が分かるような写真なども用いながら「見やすく・分かりやすく」展示することができるよう検討していきたいと思っています。また併せて作業を手伝っていただける方も募集中ですので、ご興味をお持ちの方はご連絡ください。昔の様子の話も伺えて面白いですよ!!

3. お便りから

(1) 稚咲内砂丘林に寄せて

廣畑 清(札幌市・公務員)

当法人が毎年秋に開催しているどんぐり緑の植樹イベントや稚咲内での砂丘林再生活動に携わっていただいていた方から、お便りをいただきましたので、ご紹介させていただきます。

寄稿していただきました廣畑様、大変ありがとうございました。

(ニュースレター編集担当)

先日お送りいただきましたニュースレターを拝見し、稚咲内地区の砂丘林再生の取り組みが12年目を迎えたこと、そして現地では3,747本のミズナラが育っていることを知り、初期の取り組みに関わらせていただいた一人として感慨深く、また今日まで一貫して取り組みを続けてこられた地区及び関係の皆さんの努力と弛むことのなかった強い思いに心から敬意を表したいと思います。

この取り組みは、当初、稚咲内地区の砂丘林周辺に発生していた実生のミズナラ稚樹を採取し、それらを裸地に植えるというやり方で始めました。しかし、これでは一定の植付本数を継続して確保することがむずかしいこと、また実生苗木は根の発達が不十分なため、土壌や気象条件の厳しい砂丘の裸地での生育に適さず、生存率が低いことなどの問題がありました。

そこで、これらの問題を解決するにはどうしたらよいか、地区の皆さんや関係者が集まって話し合いました(齋藤慶四郎元町長も参加しておられ、リーダー的な存在でした)。その結果、実生苗木を使うのではなく、現地の厳しい条件にもある程度耐えて生育できるよう、樹体に栄養を蓄え、かつ根系の発達した苗木を畑で育成し、それを現地に植えていくべきということになりました。その際、私は、林業の立場から、海岸林造成やミズナラの育苗に関する文献などの資料提供をさせていただきました。

ミズナラの堅果(どんぐり)は、平均して3～5年に1度程度しか豊作にならないのですが、豊作の年の秋に健全などんぐりをできるだけたくさん採集し、それを肥培された苗畑に植え、数年かけて育てることにより、苗木を安定的に確保するという課題はある程度解決されます。また、発生した幼苗を1～2年後に空いている畑に密度を減らして移植し(床替え)、山出しに向け、さらに1～2年かけて根を発達させるとともに栄養を蓄えさせ、樹体のバランスを整えることで丈夫で健全な苗木に育てることができます。

幸いにも翌年の秋にはどんぐりが豊作となり、地区の皆さんが周辺も含め、あちこちからたくさんのどんぐりを拾い集めてくださいました。また、地区の旧保育所裏の空き地に、大量の畑土が搬入され、苗畑ができあがりました。これは、豊富町役場のご協力だったと聞いています(当時の担当は吉村氏(現NPO法人代表))。



苗畑造成のため保育所裏に搬入される畑土(H20年9月)

集められたどんぐりは浸漬処理した後、さっそく苗畑に植えることになり、子供たちをはじめ地区の皆さんや関係者が集まり、ここで育った苗木が砂丘に植えられて林になっていくことを夢見て、わいわいはしゃぎながらどんぐりを土に埋めたことを思い出します。



上左：どんぐりの選別作業(平成18年)

上右：造成した苗畑にどんぐりを植える作業(平成21年)

夏の除草などたいへんな作業も皆さんで頑張って続けてこれ、今年度も苗畑に 2,081 本の苗木が育っているとのこと。皆さんが労力を惜しまないのはもとより、技術的にも安定し、取り組みが軌道に乗っていることも窺い知ることができます。



どんぐりの森づくりの記念撮影 (平成 21 年)

砂丘林再生の取り組みは、「どんぐりの森づくり」と看板も新たに地域の恒例行事として更なる発展を遂げつつ、夢の実現に向けて一步一步着実に前進しています。まさに稚内地区に暮らす人々のアイデンティティとも言える取り組みではないでしょうか。

私は、その後転勤で宗谷を離れましたが、サロベツ原野のファンの一人として、砂丘林の再生を今も応援していますし、これからもそうしていきたいと思っています。

(3) サロベツ今昔物語

～自分の中の昭和史 (21)～

野口 多美治 (豊富町・郷土研究会)

東京での下宿生活の始まり、十畳ひと間M君との同居生活はとても窮屈に感じていた。が、懐具合を考えれば致し方のないことだった。ここで少々下宿屋の様子を記しておきたい。

まずは下宿代の事、1 か月 2 食付き一人 6,500 円で当時としては少々安めだが、まあそれは二人同居という条件だったからである。大家さんは 50 代の女主人。元は売れっ子の芸者さんで資産家の方に囲われていたが旦那の死去により遺産としてこの屋敷を戴いたとのことである。その他住み込みのお手伝いさん一人、そしてもう一人は

ハンサムな 40 代男性会社員の計 5 名の同居生活であった。大家さんは大変さばけた人柄で上記の身の上など躊躇もなく私たちの前で話してくれた。また、稀代の麻雀好きであり、事あるごとに誘いをかけられたがその時の私は全くの素人で、牌を並べるのが精一杯で人数揃いの駒でしかなかったようだ。M君は上勇知の助教授時代に教員仲間と相当腕を磨いたらしく、玄人の域に達していたから麻雀の席では輝いていたものだ。

さて、肝心の学校生活はというと教授の講義以外は全くの自由で実技制作も伸び伸びやっていた。ただ、最初やや戸惑ったことがあり、それは生身の女性裸婦人体デッサンであった。座像と立像の 2 種類、それぞれ一週間裸婦との闘いである。モデルさんと向かい合うのは木炭デッサン・油絵・彫塑の三種類で木炭デッサン・彫塑についてはほぼ全裸、油絵は衣服着用も多い。何れもモデルさんと学生話し合いで決定している。モデルさんの多くは 20 代～30 代で何のわだかまりもなく職業意識に徹していた。(つづく)

(4) とよとみの民話

第 3 集 音吉の杜
北海道豊富高等学校 郷土研究部

第 2 話 梅村さんの夢 (前編)

梅村庄次郎さんは、自分の手で土地を開き農業に従事する事を夢見て北海道に移り、抜海でアイヌの音吉さんに逢い、そして現在の兜沼にやって来ました。



上写真：富本次郎吉 (音吉氏) (左) と梅村庄次郎氏 (右)

「わぁ、なんて広い土地だろう。それに沼もある。ここに水田を作ったらどんなに素晴らしい事だろう。」梅村さんはこの土地を気に入り、自分の夢をかなえるべく、一旦岐阜に戻り一緒に開拓に従事する小作人を集めました。「兜沼の土地はとても広く、そして綺麗な沼があり、大変良い所だ。」
「これなら、自分の土地も持てるし、たくさん農作物を作ることだってできる。」

しかし、翌年の春、小作人12戸を連れて兜沼に戻った梅村さんは、予想していなかった事実にとってもびっくりしました。あの美しい兜沼に雪解けの水が流れ込み、付近一帯が水浸しの状態になっていたのです。(つづく)

4. 事務局からのお知らせ (1) 新スタッフの紹介

廣瀬 実穂子（幌延町・NPO職員）



4月1日より職員として採用となりました、廣瀬と申します。出身は、岩手県盛岡市。江別市の酪農学園大学を卒業後、幌延町でお仕事をしておりましたが、この度ご縁があり、NPOで働かせていただくこととなりました。

幼いころから動物が好きで、在学中も自然環境分野について学んできましたが、今回このような施設で働く機会をいただいたことが、未だに夢のようです…。

サロベツの大自然については現在勉強中ですが、これから町内外の皆様にサロベツの素晴らしさを発信していけるように頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

4. 事務局からのお知らせ (2) 湿原センター情報

早野 佳織（幌延町・NPO職員）

今年の冬はあっけなく終わり、北国の春の兆しとなごり雪とで人が戸惑っているうちに、春の渡り鳥が早々にサロベツにやってきました。



雪解け進む湿原（4月上旬）

3月末に木道へ出たところ湿原の雪どけにバラつきがあり、雪が無いところが高層湿原、雪が残っているところが中間・低層湿原と、はっきりと分かれていました。高層湿原はふかふかのミズゴケの絨毯で温かいのでしょうか。雪どけ後の湿原は一見何も無く地味なように見えますが、雪の下で耐え抜き赤紫色になっているツルコケモモやカラフトイソツツジの葉や、薄氷から顔を出したミズバショウの芽、さらには夏に咲くノハナショウブや秋に咲くサワギキョウの緑の若葉もいち早く出ていて、命がそこここに溢れていました。



左写真：

冬を耐え抜いたイソツツジの葉（4月上旬）



春のサロベツ名物「蟹気楼」(4月上旬)

また、周りに草丈の無い春先はヤチボウズがポコポコと見えていてわかりやすく、湿原の奥に見られる蟹気楼は春のサロベツ名物です。

少しずつ力を増していく陽光を浴びた湿原の目覚めを感じに、ぜひセンターへお越しください。

(3) サロベツ四季の旅

春のサロベツ川を下ったらどんな景色が待っているだろう？ そんな思いから、カヤックで川を下ることにした。当日は、風はまだ冷たかったが、日差しはポカポカ。雪はすっかり消えて、水辺ではヤナギの芽が膨らんでいた。



春のサロベツ川をカヤック中、マガンの群れに遭遇

雪どけで増水した川はいつもより流れがあり、それほど漕がなくてもカヤックは進んでいく。これは楽しい。すると遠くの方から、キャハハン、キャハハン…という賑やかな声が聞こえてきた。しかし、川べりは一段高くなってササが生えているので、声の主は全く見えない。

すると突然、頭上にマガンの編隊が現れた。彼らも人がいるのに気づいたらしく、少し向きを変えて、高度を上げた。一周の出来事だったが、湿原の中で、しかもすぐ近くで渡り鳥たち出会えたことが何とも嬉しく、感動的な光景だった。

その後も、次々とマガンの群れが空を飛んでいき、さらにはチュウヒやハクガンも姿を見せてくれた。後半は、川の流れに逆らってスタート地点まで漕いで戻らねばならず、なかなか大変だったが、川面からは残雪の利尻山も見え、想像以上に素晴らしい春の川下りとなった。

いつかカヤックツアーを実現できたら…、この雄大さを皆さんにもぜひ味わっていただきたい。

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークとは？

当法人は、サロベツ及び周辺の自然と地域を愛する人々が集い、自然環境の保全活動、調査研究活動及び環境教育活動を通して、自然と人間との共存の大切さを広く啓蒙し、併せて地域の発展、まちの活性化に寄与し、サロベツ及び周辺の豊かで美しい自然を次世代に引き継ぐことを目的として平成16年5月に設立されました。

活動の目的にご理解いただき、共に汗を流し、ご協力下さる会員を随時募集しております。あなたの参加が活動を支えます。どうぞご加入ください。

会員になっていただける方は事務局までご一報下さい。申込方法と会費の振込先をご連絡いたします。また、会の運営を支えるご寄附も随時受け付けております。(3千円以上のご寄附は各種税控除の対象となります。詳しくは事務局まで。)



お知らせ

これまで、賛助会員様のご氏名を掲載いたしておりましたが、個人情報保護の観点から、今後は掲載しない事といたしますので、ご了承くださいませ。

<4月20日現在の会員数>

正会員 57 名 / 賛助会員 24 団体・9 個人
サポート会員 117 名 ⇒ 計 207 名・団体

※転勤などでお引越しをされた方は、住所変更のご連絡を事務局までご連絡ください。(連絡先は表紙の上部に表示しています)